

伊豆諸島御蔵島におけるモリモチビキカワムシの記録、 および近似種ムナグロチビキカワムシとの区別点について

亀澤 洋

〒 350-0825 川崎市月吉町 32-17

Records of *Lissodema morimotoi* Sasaji (Coleoptera, Salpingidae) from Mikurajima Island, the Izu Islands, Japan, and identifying points with its relative *Lissodema munaguro* Sasaji

Hiromu KAMEZAWA

モリモチビキカワムシ *Lissodema* (*Lissodema*) *morimotoi* Sasaji, 1988 は、福岡県の英彦山で採集された標本をもとに記載された、体長 2 mm ほどのチビキカワムシ科の微小甲虫である。

本種はあまり採集例が報告されることがなく、上記タイプ産地のほかは、原記載で扱われた鹿児島県佐多岬、島原半島（今坂, 2001）、本州からは三重県（生川, 2001a, b; 生川ら, 2006; 生川ら, 2011）、和歌山県（的場, 2003）から記録されているにすぎない。

御蔵島における生息確認

筆者は伊豆諸島の御蔵島で本種を確認しているので報告する。なお、御蔵島では村条例により昆虫採集は禁じられているため、許可を受けて調査を行った。

1ex., 東京都御蔵島村里, 2. VII. 2012 (トラップ); 14exs., 同, 里～川田, 2. VII. 2012; 2exs., 同, 里～黒崎高尾山, 4. VII. 2012; 筆者保管。

伊豆諸島および御蔵島初記録。照葉樹林に囲ま

れた小広場に粗朶が積んであり、日中に枯れ枝上より目視によって大部分を採集したほか、林縁のピーティング、また鬱閉した樹林内に設置した簡易式のライトトラップ（4W のブラックライトを使用）によっても得られた。ただし、ライトトラップは、点灯後、数時間放置するタイプのもので、設置、回収は明るいうちに行ったため、真に夜間、灯りに誘引されたかどうかは定かではない。点灯前の夕刻またはライトが切れた朝方に、飛翔中のものでフライト・インターセプション・トラップとして機能したライトトラップにかかった可能性があるためである。トラップは地上 1 m ほどの高さの木の枝に吊り下げていた。

なお、2013 年にも御蔵島において調査を行ったが 5-6 月には本種を確認できなかったため、出現期のピークは夏季にあるものと考えられる。

紀伊半島から伊豆諸島に分布が飛んでいる甲虫は、クロフアシナガカッコウムシ *Ommadius nigromaculatus* Lewis, 1892 やミクラヒサゴゴミムシ *Misolampidius kawadai* Nakane, 1983, クロ



図1. 御蔵島におけるモリモチビキカワムシの生息環境。A, 御蔵島を半周する環状道路の西側から里方面を望む。鬱蒼とした照葉樹林が広がっている; B, 本種が得られた林縁環境。

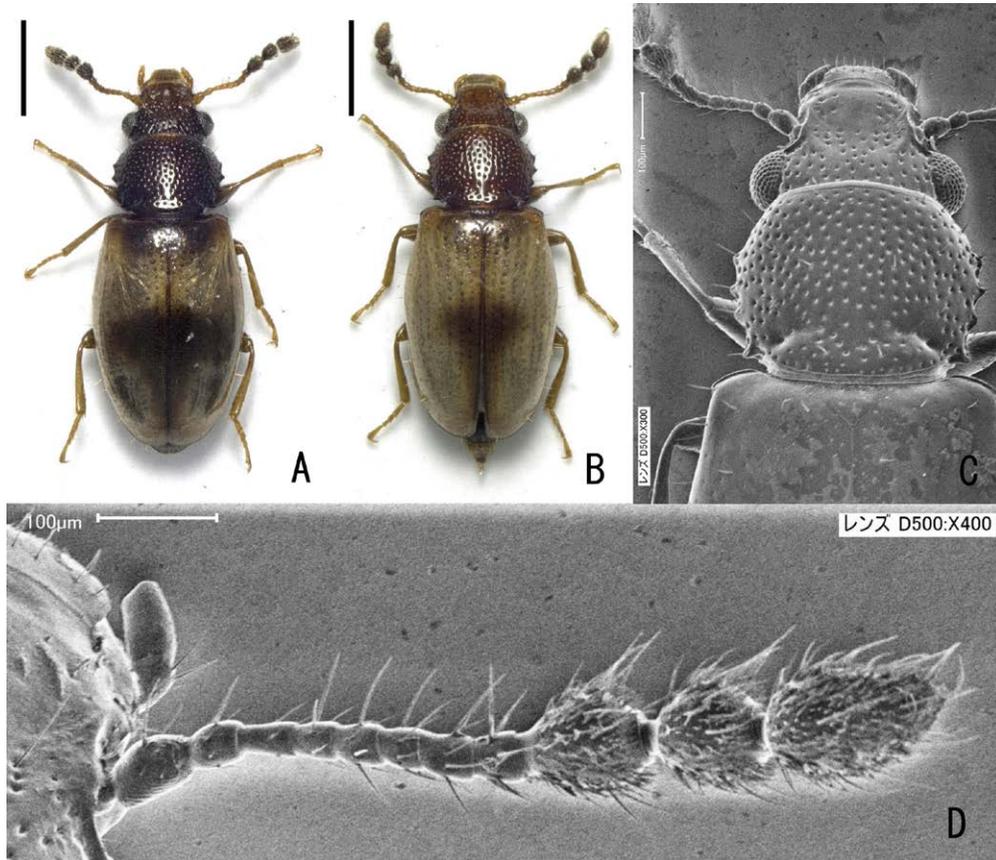


図2. モリモチビキカワムシ (御蔵島産) . A, ♂; B, ♀ (黒いスケールはともに0.5 mm) ; C, 頭胸部 (♀) ; D, 触角 (♂) .

ソンホソハナカミキリ *Mimosangalia kurosonensis* (Ohbayashi, 1936), モモビロヤサクチカクシゾウムシ *Parempleurus femoratus* Morimoto et Miyakawa, 1985 などの例が知られており, 必ずしも特例とはいいがたいが, いくぶん注目に値する. ただし, 本種は微小な甲虫で採集例自体が少ないことから, 中間地点から未発見なだけの可能性もある. 伊豆半島などに本当に分布していないのか興味を持たれるところである.

近似種ムナグロチビキカワムシとの区別点

一方で, 琉球からは, 沖縄島からもたらされた標本をもとに記載された近似種ムナグロチビキカワムシ *Lissodema (Lissodema) munaguro* Sasaji, 1988 の存在が知られている. ムナグロチビキカワムシも原記載以降, 採集例が報告されることが少なく, わずかに奄美大島から記録が追加されているにすぎない (今坂・海老原, 1997; 生川, 2001a).

両者は, 原記載によれば, 体型, 色彩のほか,

前胸背中央および上翅の点刻の状態, 触角第3節と第4節の長さの比率などによって区別される. 以下に, Sasaji (1988) および佐々治 (1989) で示された区別点を整理する (適宜, 和名の「~チビキカワムシ」は省略).

1) 色彩は頭胸部が暗赤褐色のモリモチに対して, ムナグロは黒い.

2) 上翅条溝の点刻はモリモチではやや強いのに対し, ムナグロでは非常に細かい.

3) 前胸背中央の点刻がやや大きく点刻間がやや盛り上がるのがモリモチで, 小さく点刻間が平らなのがムナグロ.

4) 触角の第3, 4節の長さの比較でモリモチは $3 = 4$, ムナグロは $3 > 4$.

5) 体型はひょうたん型で, モリモチは体長がやや長く体幅の2.3倍, ムナグロはやや短く2.1倍.

御蔵島から得られた個体群はモリモチビキカワムシとみなすことができたが, 御蔵島産では個体変異もあり, 比較標本なしに近似種ムナグロチ

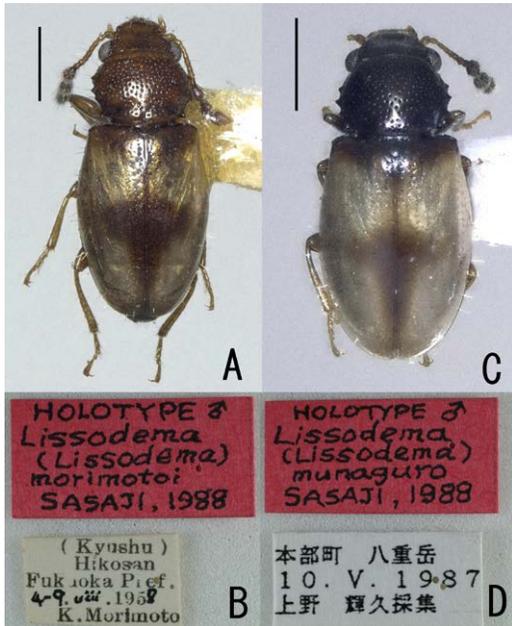


図3. A, モリモトチビキカワムシ *Lissodema (Lissodema) morimotoi* Sasaji, 1988 のホロタイプ標本 (♂) ; B, 同ラベル ; C, ムナグロチビキカワムシ *Lissodema (Lissodema) munaguro* Sasaji, 1988 のホロタイプ標本 (♂) ; D, 同ラベル. スケールはともに 0.5 mm, いずれも九州大学総合研究博物館所蔵.

ビキカワムシと区別することが筆者には難しかった。そこで、走査型電子顕微鏡 (SEM) によるタイプ標本の観察も合わせて行ったため、同定の確定にいたった要点について述べてみる。

御蔵島産の個体群には色彩変異が認められた。上翅斑紋が拡大する個体から縮小するものまで連続的で、同時に前胸背および頭部も赤褐色から黒褐色まで色彩変異がある。このような色彩変異は、比較的多くの個体が得られている紀伊半島産でもみられる。

また御蔵島産では上翅条溝の点刻は、実体顕微鏡下の観察ではやや強いようにみなされたが、これは上翅内部の構造が透けて見えているためで、SEM による観察では非常に小さな点刻しかなくことが確認された。上翅の点刻の状態は、モリモトとムナグロの両者のタイプ標本を比較しても明確な差を認めにくかった。

兩種間の差がもっとも大きいのは、前胸背の表面構造だった。ただし、比較標本が手元にないと必ずしも差は明確ではないため、SEM による画像を比較されたい。前胸背の点刻はモリモトのほうが大きく、点刻間が狭いのに対し、ムナグロでは点刻がより小さく点刻間が平板である。前胸背基

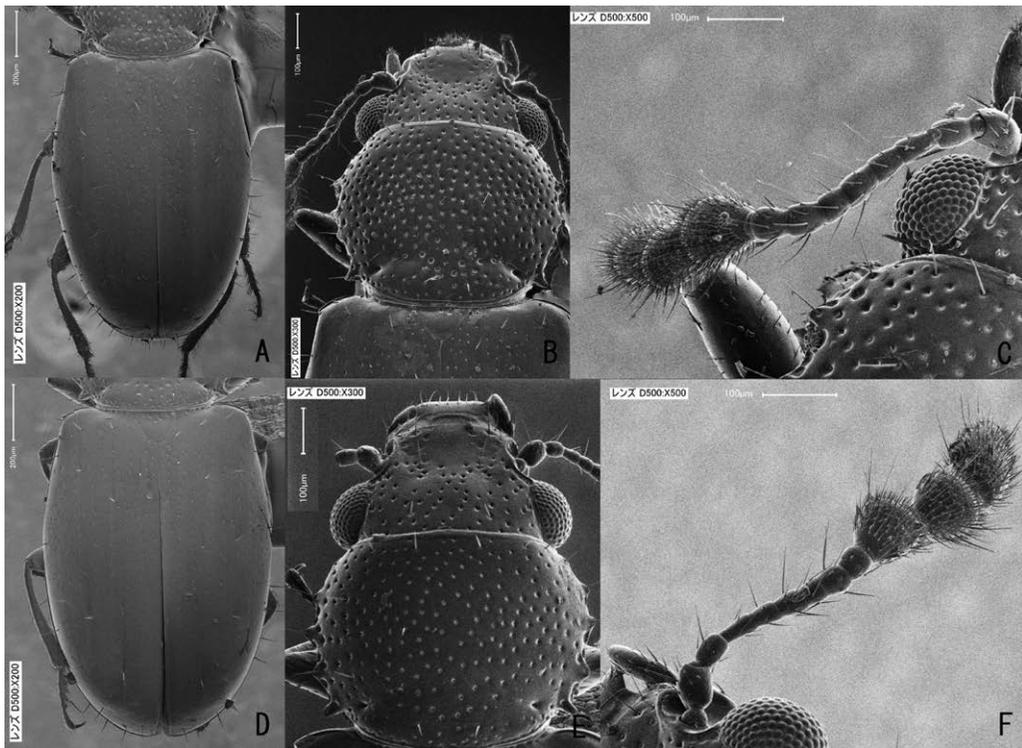


図4. SEM観察によるモリモトチビキカワムシ (A, B, C) とムナグロチビキカワムシ (D, E, F) のホロタイプ標本の各部. A, D, 上翅; B, E, 前胸背; C, F, 触角.

部の1対の凹陷もモリモトのほうが強く印され、後角付近の大点刻も大きく、また深い。御蔵島産はモリモトの特徴に合致している。

また、御蔵島産では触角第3節は第4節よりも明らかに長いため、Sasaji (1988) および佐々治 (1989) によって示された検索表による同定では、当初、御蔵島産の個体群はムナグロと同定するのが妥当ではないかと考えていた。しかしながら、モリモトチビキカワムシのタイプ標本を調査したところ、第4節より第3節のほうがわずかに長いことが確認された。

体型は下膨れ気味の体型をしているムナグロに対して、モリモトでは体の最大幅となる上翅のほぼ中央から翅端までの側縁部の曲線がより直線的である。この点でも、御蔵島産はモリモトに近い特徴が認められる。

以上のことから総合的に判断して、御蔵島で今回得られた個体群は、モリモトチビキカワムシと考えられた。

外部形態から雌雄の区別はしにくい、雄は複眼の突出程度がやや甚だしいようである。体長は本属では普通のことと思われるが、変異の幅があり、御蔵島で得られた個体群の体長は1.5～2.3 mm だった。

謝辞

本研究の一部は、小島弘昭博士を研究代表者とする科研費(24510333)の助成を受けた。同博士に厚くお礼申し上げる。また有益な情報をくださった

た今坂正一と上野輝久の両氏、現地調査にあたって便宜をはかってくださった、みくらしま観光協会の菱井徹、小木万布の両氏、タイプ標本を検討するにあたって助力くださった九州大学総合研究博物館の丸山宗利博士、三重県産のモリモトチビキカワムシを検査する機会を与えてくださった生川展行氏、調査全般およびSEMによる観察に協力してくださった国立科学博物館の野村周平博士に謝意を表す。

引用文献

- 今坂正一・海老原元, 1997. 奄美大島で採集した昆虫類. *Korasana*, (64): 1-41.
 今坂正一, 2001. 島原半島の甲虫相 3. 長崎県生物学会誌, (52): 56-73.
 的場 績, 2003. 和歌山県産チビキカワムシ科. *KINOKUNI*, (64): 19.
 生川展行, 2001a. 興味深いチビキカワムシ2種の記録. 北九州の昆虫, 48(1): 3.
 生川展行, 2001b. 三重県のチビキカワムシ科(主に文献記録のまとめ). ひらくら, 45(6): 176-179.
 生川展行・中山 惇・岡 由佳理・横関秀行・稲垣政志・官能健次・市川 太, 2011. 志摩半島の甲虫. 66-195pp., 三重昆虫談話会編, 志摩半島の昆虫.
 生川展行・市橋 甫・天春明吉・市川 太・稲垣政志・官能健次・前川和則・横関秀行, 2006. 熊野灘沿岸照葉樹林の甲虫類, 63-188pp., 三重昆虫談話会編, 熊野灘沿岸照葉樹林の昆虫.
 Sasaji, H. 1988. Contribution to the taxonomy of the superfamily Cucujoidea (Coleoptera) of Japan and her adjacent districts, IV. *Memoirs of the Faculty of Education, Fukui University Series II (Natural Science)* 38: 13-48.
 佐々治寛之, 1989. 日本産チビキカワムシ科概説(2). *福井虫報* (4): 25-32.

(2014年2月17日受領, 2014年5月23日受理)

【短報】ニセマルハナノミの富士山における記録

ニセマルハナノミ *Declinia versicolor* Sakai et Satô は, Sakai & Satô (1996) によって, 大陸の *Declinia relictata* とは独立な種であるとして記載されたもので, 日本においては1科1属1種の種である。

採集記録は, 本州および四国の山地(以下, 引用文献がないものは Sakai & Satô (1996) による; 群馬県: 片品村(亀澤, 1998); 埼玉県: 大滝村(新井, 2004); 神奈川県: 丹沢; 山梨県: 須玉町(木元, 1997); 長野県: 北沢峠, 長谷村; 岐阜県: 日和田・千間樽高原; 岡山県(渡辺, 2008); 愛媛県: 小田深山), および北海道(平野, 2005)に局所的に散在している。

筆者は富士山において採集しているので報告する。

1♀, 山梨県富士鳴沢林道, 9. VII. 2009, 大木裕保管。

標本を同定していただいた平野幸彦氏, および

お世話になった日下部良康氏に心からの謝辞を申し上げます。

引用文献

- 新井浩二, 2004. 埼玉県から新たに記録される甲虫類(7). 寄せ蛾記, (114): 1-9.
 平野幸彦, 2005. 北海道にもいたニセマルハナノミ. 月刊むし, (418): 27-28.
 亀澤 洋, 1998. 日光山塊におけるニセマルハナノミの記録. 甲虫ニュース, (124): 16.
 木元達之助, 1997. 奥秩父八丁平における甲虫類の採集記録. 月刊むし, (317): 36.
 Sakai, M. & M. Satô, 1996. The coleopteran family Decliniidae (Elateriformia, Scirtoidea) new to Japan, with description of the second representative. *Elytra*, Tokyo, 24 (1): 103-110.
 渡辺昭彦, 2008. 岡山県でニセマルハナノミを採集. 月刊むし, (445): 42.

(大木 裕 225-0015 横浜市青葉区荏田北 2-17-13)

ハマベキクイゾウムシ (ゾウムシ科; キクイゾウムシ亜科) の分布とその生息環境について

亀澤 洋

〒 350-0825 川越市月吉町 32-17

Notes on the distribution and a habitat of *Dryotribus mimeticus* Horn (Curculionidae; Cossoninae),
with new records from northern Hokkaidô, Mikurajima Is. (Izu Isls.) and inland area of Japan

Hiromu KAMEZAWA

はじめに

ハマベキクイゾウムシ *Dryotribus mimeticus* Horn, 1873 はアメリカのフロリダ半島沖のキーウエスト島から得られた標本をもとに記載されたゾウムシ科の小甲虫である。和名に「ハマベ」を冠するように、沿岸部で発見されることの多いキクイゾウムシであり、後述するように、その分布は驚嘆に値するほど広域に及ぶ。

また、本種は朽ち木にすむため生態的に農業害虫にはなり得ないにもかかわらず、意外にも有名種といえる。その理由は、国際自然保護連合 (IUCN) によってまとめられた 1996 年の絶滅種リストに本種の掲載があり、情報更新が必要との注記があるものの、ハワイ諸島における地域絶滅種に指定されているためである (<http://www.iucnredlist.org/>)。このような種のため、インターネット百科事典のウィキペディアにも立項があり、それをもとに 88 ページもある冊子が 2011 年に出版されている。

今回、文献記録からこれまでに判明している分布像をまとめるとともに、筆者の手元のデータをいくつか示して分布情報を追加する。さらに、あまり知られていないと思われる日本の内陸部における本種の生息環境についても言及する。

国内分布

1989年に刊行された日本産昆虫総目録によれば、国内の分布は本州、伊豆諸島(大島、式根島、三宅島、八丈島、青ヶ島)、四国、九州、トカラ中之島、奄美大島、石垣島、北大東島が知られ、国外では汎熱帯域に広く分布するという。この分布は, Chûjô and Voss (1960), Konishi (1962) および Morimoto and Miyakawa (1985) によって示されたデータをまとめたものである。その後国内から記録されていないか調べた結果、奥尻島(楠井, 1990)、山形県飛島(小島, 2012)、伊豆諸島新島(平野ら, 1993)、

日本の最東端の南鳥島(森本, 2001)からの生息情報を見いだすことができた。

なお、小笠原諸島の昆虫目録に本種が入っている場合も見受けられた(日本林業技術協会, 2003)。一方で、森本(1985)は小笠原諸島には本種の近似種が分布することを指摘している。森本博士からの私信によると、小笠原諸島には本種とその近似種 *Dryotribus* sp. の 2 種が分布し、複数の島から得られた本種標本が博士の手元にあるそうである。

国外分布

国外の分布について、もう少し詳しく情報を拾ってみる。

フロリダ半島南部の沿岸部は島嶼も含め各所(Blatchley and Leng, 1916; Blatchley, 1922)、メキシコのユカタン半島(Fosberg, 1962)、西インド諸島

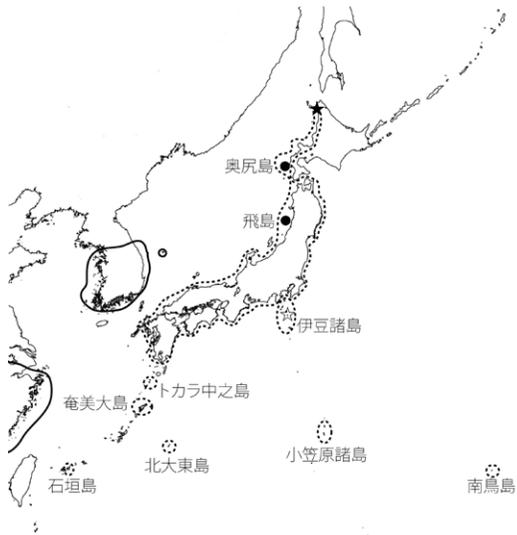


図1. 国内と周辺地域におけるハマベキクイゾウムシの分布。破線が国内分布で実線が周辺国における分布。★は北海道稚内、☆は伊豆諸島御蔵島。

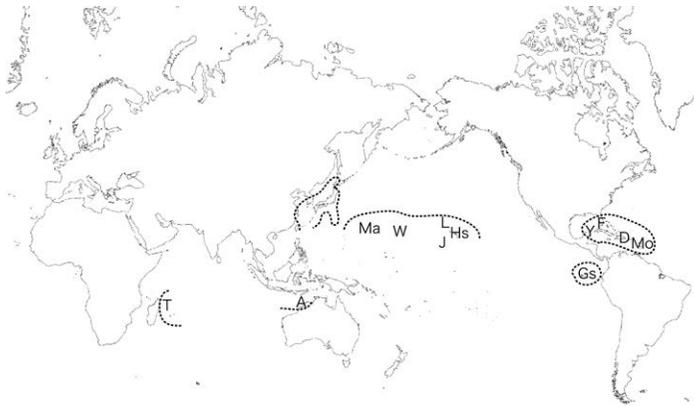


図2. ハマベキイゾウムシの世界的な分布概念図。記号T, トロメリン島 (フランス領); A, アデル島 (オーストラリア); Ma, 南鳥島 (別名マーカス島); W, ウェーク島; J, ジョンストン環礁; L, レイサン島 (北西ハワイ諸島); Hs, ハワイ諸島; Gs, ガラパゴス諸島; Y, ユカタン半島; F, フロリダ半島; D, ドミニカ; Mo, モントセラト (イギリス領)。

のドミニカやバハマのアンドロス島 (ハーバート大学の「カリブの昆虫と植物のデータベース」による), 小アンティル諸島のモントセラト (Ivie *et al.*, 2008), カリブ海に浮かぶグレナディーン諸島のマスティック島 (Champion, 1909), 北西ハワイ諸島のフレンチ・フリゲート礁 (Beardsley, 1966) およびレイサン島 (Perkins, 1926), ハワイ諸島のラナイ島 (Perkins, 1900) やオアフ島 (Anonymous, 1917), 北太平洋のジョンストン環礁やウェーク島 (Perkins, 1926), マダガスカルとモーリシャス島の間に位置するトロメリン島, オーストラリア北西部やアデル島 (Staub, 1970), Peck (2006) によれば, ガラパゴス諸島からも複数の島 (イサベラ島, フェルナンディナ島, サンタ・クルス島, サン・クリストバル島, エスパニョラ島, マルチェナ島) から記録がある。

旧北区のカタログでは中国, 朝鮮半島も分布域に含まれる (Hlaváč and Maughan, 2013)。朝鮮半島に関しては, Hong *et al.* (2012) がまとめた目録によると, 中部, 南部, 鬱陵島がその分布範囲である。中国からの記録については, Staub (1970) が浙江省 (Chekiang) に分布すると言及している。

本種が孤立した海洋島や環礁にさえ生息しているのは, 海流によって分布を広げた結果と考えられているほか (Perkins, 1926), 人為的な移入も疑われている。ハワイにおける本種の分布は導入されたとする説がある一方で (Champion, 1909), Zimmermann (1940) は, 本種を含む *Dryotribus* 属が太平洋諸島に複数みられ新大陸には本種しか分布しないことから, 逆に本種のアメ리카における分布が人為的なものではないかと推定している。い

ずれにしても, 小島嶼の苛烈な環境下などで見つまっていることから, 本種の好む環境が透けてみえてくる。

海浜および島嶼部からの新記録

自然的な分散においては, 本種は後翅が退化しているため, 流木にともなって移動しているものと想像される。実際に日本においても沿岸部からの記録が多い。のみならず, 沿岸性種と見なされていることから, 現代日本における海浜環境の自然度の劣化によって絶滅の危機にさらされていると考えられ, 宮城県, 神奈川県では県版のレッドデータブックに掲載され

ている。

以下に, 筆者の手元の標本から, 興味あるデータを示す。いずれも, 海流による分散の結果と見なすことが可能な分布確認例である。

2 exs., 北海道天塩郡豊富町稚咲内, 12. VII. 2008; 1 ex., 東京都御蔵島村里, 13. V. 2013; 1 ex., 千葉県館山市坂田, 2. V. 2013, すべて筆者採集, 保管。

北海道の本土部からは初の記録となるとともに, 本種の分布域の最北の記録になるものと思われる。伊豆諸島からは広く知られていたが, 御蔵島からはこれまで記録がなかった。

稚咲内では, さほど遠くない場所に風力発電の巨大なプロペラがまわっていた以外は自然度の高い砂浜海岸の, 内陸部寄りの段丘に打ち上げられて半分砂に埋まった流木から, 御蔵島では集落内の耕作地周辺のススキの根際地表のシフティングによって採集された。千葉県からのデータは砂浜に打ち上げられた海藻下より生きた個体を得たので, 本種の海流による分散を示唆する採集例として特に取り上げた。

内陸部からの確認例

以上のように島嶼や海岸から見つかることの多い本種ではあるが, その発見例は沿岸部にとどまらない。以下に内陸部からの採集例を示すが, 確認範囲も広いため特殊な偶産とは考えにくい。

4 exs., 埼玉県春日部市東中野, 17. XII. 2005; 2 exs., 埼玉県川越市池辺, 23. I. 2014; 3 exs., 埼玉県志木市下宗岡, 1. II. 2014, すべて筆者採集, 保管。

春日部市では果樹園の脇に置かれた材木の下から, 川越市では入間川にかかる関越自動車の橋



図3. 内陸部におけるハマベキクイズウムシ確認環境。A, 埼玉県川越市; B, 同, 志木市。いずれも河川にかかった橋の袂の下(河川敷の外側)の雨のかからない乾燥地であった。

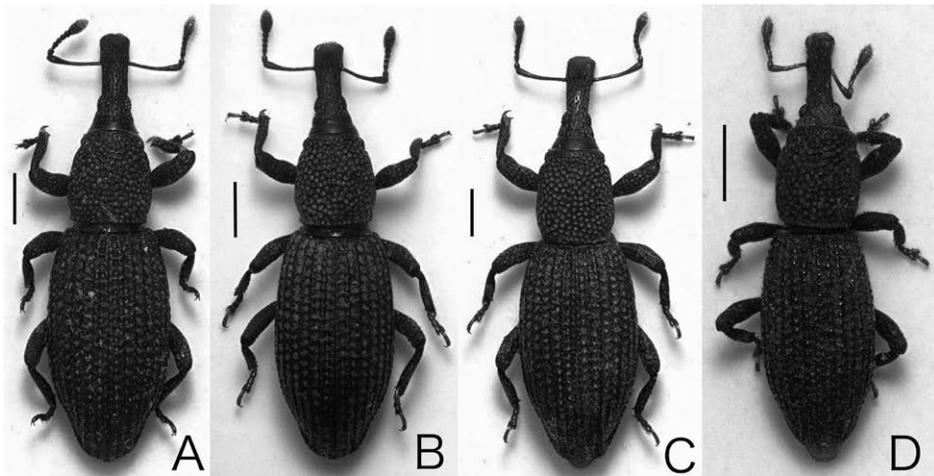


図4. 各地のハマベキクイズウムシとその近縁種。A, 北海道稚内産; B, 埼玉県志木市産; C, 伊豆諸島御蔵島産; D, 小笠原諸島の近縁種 *Dryotribus* sp., 母島乳房山, 1. I. 2008 筆者採集, スケールはすべて0.5 mm。

下の堤内(河川敷の外側)に落ちた石裏面から、志木市では荒川にかかる橋脚下の板や石下より採集された。海岸部のない埼玉県からは、これまで公式に報告されていないと思われる。

上記の確認例は、すべて海からは25～35 kmほど離れた内陸部からの記録である。本種は、意図的なものではないとしても、人為的な移動によって生息域を拡大しているものと考えられる。インターネット上で検索してみても、本種と考えられる標本または画像は、都市部を中心に内陸部の各地で得られている。

また幸形氏からの私信によると、大阪府では木造建物の床下で本種が見つかるのはまれではなく、京都府でも東山区の山寺や綾部市の民家床下の乾燥環境から確認されているという。氏のご好意によりデータを以下に示す。

1 ex., 京都府綾部市本町, 22. X. 1988, 山下雅司採

集; 1 ex., 京都市東山区林下町(建物脇に放置された木材より採集), 5. VII. 2006; 1 ex., 大阪府東大阪市小阪本町(家屋で採集, 内陸部というほどでもないが海辺でもない), 3. VI. 1995; 以上, 幸形聡採集, 保管。

興味深いのは、本種が海辺以外から見つかる場合、人為的な環境ないしは自然度の低い環境下での採集例が少なからず見られることである。むしろ、自然度の高い森林では確認されていないのではないかとと思われる。

沿岸域の流木や朽ち木の下面などで生活する本種は、直接高温にさらされることはないと思なされるものの、灼熱と乾燥を繰り返す海辺の塩性環境下でも生息可能である。このような特殊環境が本来の生息場所であるがゆえに、人為的な環境のもとでの乾燥にもよく耐え、内陸部の都市や農耕地など、人間活動の影響の大きな地域にも進出し

ていると考えられる。

謝辞

末筆ながら、問い合わせに応じてくださった新井浩二、堀繁久の両氏、貴重なデータを提供してくださった幸形聡氏、ならびに草稿を読んでくださりご指摘をくださった小島弘昭、森本桂、野村周平の3博士に心よりお礼申し上げる。

引用文献

- Anonymous, 1917. February 3rd, 1916. Proceedings, Hawaiian Entomological Society, 3(4): 266–268.
- Beardsley, J. W., 1966. Insects and other terrestrial Arthropods from the Leeward Hawaiian Islands. Proceedings, Hawaiian Entomological Society, 19(2): 157–185.
- Blatchley, W. S., 1922. Notes on the Rhynchophora of eastern north America, with characterizations of new genera and descriptions of new species. Journal of the New York Entomological Society, 30(3): 113–127.
- Blatchley, W. S. and C. W. Leng, 1916. Rhynchophora or weevils of north eastern America. 682pp., Indianapolis, The Nature Publishing Company.
- Caribbean Insect & Plant Database (<http://insects.oeb.harvard.edu/caribbean/>). カリブの昆虫と植物のデータベース, ハーバート大学. 2014年3月閲覧
- Champion, G. C., 1909. Rhynchophora. Biologia Centrali-Americana IV. Pt. 7, 1–177pp., Smithsonian Institution.
- Chūjō, M. and E. Voss, 1960. Neue Curculioniden-Subfamilie, -Gattungen und -Arten von Japan (Coleoptera, Curculionidae). Memoirs of the Faculty of Liberal Arts & Education, Kagawa University (Part II), (94): 1–17.
- Fosberg, F.R., 1962. A brief survey of the cays of Arrecife Alacran, a Mexican atoll. The Pacific science board, National Academy of Sciences (National Research Council), Atoll research bulletin, 93: 1–25.
- Konishi, M., 1962. Taxonomic studies on the Cossoninae of Japan (Coleoptera : Curculionidae), Part 1. Insecta Matsumurana, 25(1): 1–17.
- 平野幸彦・上田康之・渡 弘・吉田篤人, 1993. 伊豆新島産甲虫類採集報告. 神奈川虫報, (104): 1–12.
- Hlaváč, P. and N. Maughan, 2013. Cossoninae. 217–229pp., Löbl, I. and A. Smetana eds., Catalogue of Palaearctic Coleoptera Vol. 8, Brill
- Hong, K. -J. Park, S. and K. Han, 2012. Arthropoda: Insecta: Coleoptera: Curculionidae: Curculioninae, Cossininae, Mesoptiliinae-Weevils II. Insect Fauna of Korea, 12(7): 1–179.
- Horn, G. H., 1873. Contribution to a knowledge of the Curculionidae of the United States. Proceedings of the American Philosophical Society, 13(91): 407–469.
- 小島弘昭, 2012. 山形県飛鳥のゾウムシ上科甲虫相. さやばねニューシリーズ, (6): 31–34.
- 楠井善久, 1990. 奥尻島の昆虫 (III) - オトシブミ科・ゾウムシ科・オサゾウムシ科 -. Jezoensis, 17: 48–53.
- 森本 桂, 1985. キクイゾウムシ類概説 : III. キクイゾウムシ亜科 (2). 家屋害虫, (23,24), 19–28.
- 森本 桂, 2001. 南鳥島の昆虫採集記 . 北九州の昆虫, 48(2): 71–75, 2 pls.
- Morimoto, K. and S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan (Coleoptera). Mushi, 50(3): 19–85.
- 日本林業技術協会, 2003. 添付資料 : 2. 生物種リスト (小笠原固有種・昆虫リスト). 46–101pp, 平成 14 年度小笠原地域自然再生推進調査報告書 .
- Peck, S. B., 2006. Superfamily Curculionoidea. 253–280pp., The Beetles of the Galápagos Islands, Ecuador: Evolution, Ecology, and Diversity (Insecta: Coleoptera). NRC Research Press.
- Perkins, R. C. L., 1900. Coleoptera Rhynchophora, Proterhinidae, Heteromera and Cioidae. Fauna Hawaiiensis Vol. II, Part III, Coleoptera I, 117–270pp.
- Perkins, R. C. L., 1926. Coleoptera, weevils. Insects of Hawaii, Johnston Island and Wake Island. Bernice P. Bishop Museum Bulletin, 31: 53–66.
- Ivie, M. A., K. A. Marske, I. A. Foley and L. L. Ivie, 2008. Appendix 2. Species lists of the beetles, non-beetles hexapods and non-hexapod invertebrates of Montserrat. 237–311pp., A Biodiversity Assessment of the Centre Hills, Montserrat, Durrell Conservation Monograph No.1, Durrell Wildlife Conservation Trust.
- Staub, F., 1970. Geography and ecology of Tromelin Island. Atoll Research Bulletin, (136): 197–209.
- Zimmermann, E. C., 1940. Synopsis of the genera of Hawaiian Cossoninae with notes on their origin and distribution (Coleoptera, Curculionidae). Occasional papers of Bernice P. Bishop Museum, 15(25): 271–293.

(2014年4月9日受領, 2014年6月3日受理)

【短報】オビモンコミズギワゴミムシの広島県からの記録

オビモンコミズギワゴミムシ *Tachyura ceylanica* (Nietner, 1858) は, Ceylon を基準産地として記載された, 体長 1.8 ~ 2.0 mm 程度の小型のコミズギワゴミムシである. 我が国からは, Tanaka(1959) により神奈川県平塚市で採集された標本を基に報告されたのが最初である. 中根(1978) は, 海外の分布域としてセイロン (現・スリランカ), インド, ビルマ (ミャンマー), マレイ (マレーシア), フィリピン, セレベス (スラウェシ), 南支 (中国南部) を挙げている. 国内の記録は少なく, 前述の神奈川県平塚市の他に, 石垣島 (Habu, 1975), 東京都 (和泉, 1990), 神奈川県内数ヶ所 (平野, 2004) の

記録があるにすぎない.

昨年, 筆者は, 広島県で本種を採集しているののでここに報告する.

3exs. (図 1), 広島県竹原市吉名, 28. IX. 2013.

瀬戸内海に面する塩湿地での灯火採集で得られたものである. その後, 数回にわたり地表の探索, 灯火採集を試みたが追加することは出来なかった. 本種の国内での報告例が少ないのは, 同定自体が難しいことのほか, 埋め立て, 護岸工事, 水質悪化等によってその生息環境の減少によるものと思われる. これまでの採集地から, 本種が河口や塩湿地などに依存していることが示唆されるが, 和泉(1990)の記録は, 森田誠司氏によると, 東京都大田区内の落葉下から採集された模様で, 海浜

【短報】沖縄島からツツイキバナガミズギワゴミムシを記録

ツツイキバナガミズギワゴミムシ *Bembidion tsutsuii* (Uéno, 1955) は、トカラ列島の中之島から記載された潮間帯に生息するミズギワゴミムシである。本種は、タイプ産地のほかに奄美大島(森田ら, 1996), 屋久島(Nakane, 1956), 長崎県(松尾・深川, 2008), 愛知県(森田ら, 1996), 静岡県(多比良・松本, 2000), 千葉県(亀澤, 2012)の沿岸部から限定的に見つかっている。

生息確認地によっては護岸工事などによりすでに絶滅したと考えられている地域もあり, 自然海岸の減少が著しい今日, ほかにも発見されないまま消えていった生息地があったとしても不思議ではない。そのような理由によるものだろう, 2012年に公表された環境省の第4次レッドリストに, 本種は準絶滅危惧種として掲載されている。

筆者は沖縄島中部で本種を確認しているので報告する。

♂♂5♀♀, 沖縄県名護市瀬嵩, 8. V. 2014, 筆者保管。

沖縄島からは初記録となるとともに, 現時点での本種の最南の生息場所である。確認地点は大浦湾の沿岸部で, 近隣の海域では埋め立て工事が予定されている。

すべての個体が岩礁地帯の比較的大きな石下より採集された。満潮時には波に洗われるような場所であった。この時期, 未成熟個体が半分以上を占め, 羽化後時間を経っていない軟弱な個体もみられた。十分に成熟した個体では全体に黒っぽい, そうではない個体は特に頭胸部の赤みが強かった。同時に本種と思われる終齢サイズの幼虫も石下より確認された。

なお, 琉球列島からは体色の濃い潮間帯性のキバナガミズギワゴミムシ類として徳之島から記載されたクロキバナガミズギワゴミムシ *Bembidion*

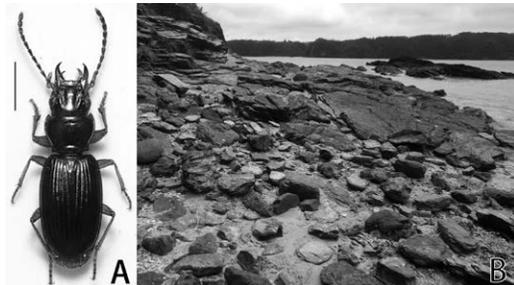


図1. ツツイキバナガミズギワゴミムシとその生息環境。A, ♂個体(沖縄島産, スケールは1mm); B, 大浦湾における確認環境。

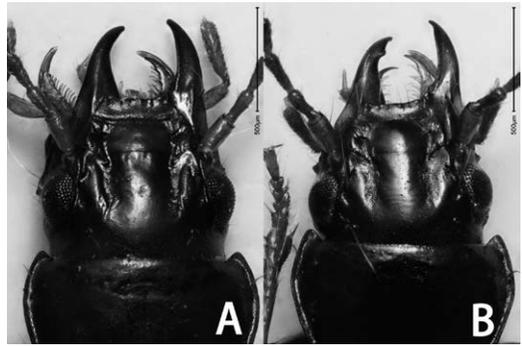


図2. 近似種と頭部を比較。A, ツツイキバナガミズギワゴミムシ頭部(沖縄島産, 前頭溝はより深い); B, クロキバナガミズギワゴミムシ頭部(沖縄島産, 左の大あご先端付近に内歯をそなえる)。

tokunoshimanus (Nakane, 1956) が知られている。ツツイキバナガミズギワゴミムシでは, 左の大あごの先端付近に内歯をそなえないこと, 体色はより薄い傾向にあり, 背面はより扁平で, 上翅の光沢が鈍いことなどにより区別は容易である。

末筆ながら, 比較標本を恵んでくださった森田誠司氏に心よりお礼申し上げる。

引用文献

- 亀澤 洋, 2012. 房総半島におけるツツイキバナガミズギワゴミムシの発見. さやばねニューシリーズ, (6): 36-37.
- 環境省, 2012. 報道発表資料, 第4次レッドリストの公表について(お知らせ). 添付資料, 別添資料 7-5 昆虫類のレッドリスト(平成24年8月28日) <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=15619>
- 松尾照男・深川元太郎, 2008. ツツイキバナガミズギワゴミムシ長崎県の記録. 甲虫ニュース, (163): 8.
- 森田誠司・白井勝巳・蟹江 昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録. 豊橋市自然史博物館報, (6): 27-30.
- Nakane, T., 1956. On a new species of *Armatocillenus* and its allies in Japan (Harpalidae: Trechinae). *Insecta Matsumurana*, (19): 101-104.
- 多比良嘉晃・松本雅道, 2000. 静岡県における海岸性甲虫相. 環境システム研究, (7): 39-71.
- Uéno, S. -I., 1955. Marine insects of the Tokara Islands VII. New species and new subspecies of the subfamily Trechinae (Coleoptera, Harpalidae). *Publication of the Seto Marine Biological Laboratory*, (4): 403-413.

(亀澤 洋 350-0825 川崎市月吉町 32-17)